

[書評] Richard A. Shroeder, Shady Practices:
Agroforestry and Gender Politics in Gambia

著者	高根 務
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	42
号	6
ページ	85-88
発行年	2001-06
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/337

Richard A. Schroeder,

Shady Practices: Agroforestry and Gender Politics in the Gambia.

Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1999, xxxvii+172pp.

高根 務

はじめに

援助機関が開発介入をおこなう際の重点分野や、それを支えるイデオロギーは時代とともに変化する。過去四半世紀あまりの開発プロジェクトは、「ベーシック・ヒューマンニーズ」、「開発における女性」(WID)、「持続可能な開発と環境」、「参加型開発」など、それぞれの時代を風靡した「開発の合い言葉」とともにおこなわれてきた。そしてこれらの合い言葉は、援助機関のみならず途上国政府によっても採用され、各国の政策プライオリティに影響を与えている。

本書はこのような開発の重点分野のシフトが、実際の開発介入を通じてガンビアの農村における農業生産とジェンダー関係にどのような変化をもたらしたかを分析したものである。ガンビア西部では1970年代後半から、女性農民による販売用の野菜生産が活発におこなわれはじめ、開発における女性の役割を重視する当時の開発介入もこれを積極的に支援した。しかしその後、開発介入の重点が「環境」にシフトしてアグロフォレストリーのプロジェクトが開始されると、女性農民の野菜畑は次第に男性地主が保有する果樹園に取って代わられる。本書はこのような変化の過程を、男性と女性および妻と夫の間に存在する社会経済的な力関係(ジェンダー・ポリティックス)の変化に注目しながら詳細に明らかにしている。

西アフリカにおける農業生産の変化を分析する際に、ジェンダー関係に注目することが特に重要になるのは、次のような理由による。農業生産を分析する研究の多くは、「世帯」を消費および生産をおこなう単一の経済単位ととらえ、一個の世帯は一個の個人と同じように効用最大化を行うと仮定してきた。この考え方のもとでは、世帯内では経済資源が共同でプールされ、資源は世帯全体の厚生のために使用される、と仮定されている。しかし近年の研究は、世帯をこのように単一の経済主体ととらえるアプローチ(いわゆる“unitary” approach)が、西アフリカの実態を分析する際には必ずしも有効でないことを明らかにしてきている。西アフリカの農村地帯においては、夫と妻はしばしば独立した圃場を経営し、それぞれの収益が共有されない場合もある。また土地や労働力などの資源に対する権利関係にもジェンダーを軸とした相違がみられ、両者の間ではしばしば対立も顕在化する。さらにこのような世帯内の経済関係や資源配分は、世帯内における社会経済的な権力関係と不可分の関係にある。本書は西ガンビアの農村におけるこのようなジェンダー関係が、農業生産の変化や開発介入の変化と関連しながら変貌を遂げていく過程を分析したものである。

I 本書の内容

本書の構成は以下のようになっている。

- 第1章 序
- 第2章 女性による換金作物生産の活発化——マンディング女性の菜園ブーム——
- 第3章 第2の夫のもとへ——菜園ブームと世帯内のポリティックス——
- 第4章 よりよき家庭と菜園——野菜生産の社会関係——
- 第5章 昔の支配地へと枝葉を伸ばす——マンディングの菜園と果樹園をめぐるジェンダー・ポリティックス——
- 第6章 アグロフォレストリーの導入をめぐる抗争
- 第7章 陰多き実践

本書では第1章でジェンダーに関する理論的な考察がおこなわれた後、本書前半部分で1970年代から活発化した女性農民による野菜生産の実態が分析され、続く後半部分で80年代後半から導入されたアグロフォレストリーのプロジェクトの影響が分析されている。まず第1章では、本書が研究対象としているガンビアの農村開発プロジェクトが、開発に関するどのような国際的な思想を背景におこなわれたのか、批判的に検討されている。著者はまず、家事育児や家族の世話などに代表されるような自己犠牲的で報酬を求めない社会経済活動が、女性に生得的なものであり自然な行動であるとする「母性愛他主義」(maternal altruism)の前提の危険性を強調する。同様に、女性の経済活動が環境保護活動と密接に関連しており女性と環境との結びつきは生得的なものであるとする、エコフェミニズム思想の危険性も指摘する。女性と家族の世話、あるいは女性と環境との関係を、「自然」で「生得的」なものとして決定論的に扱うことにより、これらの関係の背後にある社会的・イデオロギー的な原因が隠蔽されているからである。そしてこのような前提のもとに実施される「女性」、「環境」関連の開発プロジェクトは、女性の支援という当初の意図とは逆に、プロジェクトに伴う責任や必要な労働力の負担を女性に押しつけ、女性の活動を逆に制限することにつながりかねない、と著者はまとめている。

第2章から第4章にかけては、ガンビア西部において1970年代後半から80年代にかけて活発化した、女性農民による野菜生産の内容とその影響が分析されている。まず第2章では、この地域で野菜生産が急速に活発化した背景にある社会経済的要因が明らかにされる。その要因とは、(1)生活必需品の高騰と消費性向の変化により現金収入の必要性が高まったこと、(2)度重なる雨量不足のため従来の主要作物である米や落花生以外の収入源が重要になってきたこと、(3)主要な現金収入源であり主に男性が従事していた落花生生産が停滞していることから、家計における女性農民の貢献度が高まってきたこと、(4)「開発における女性」(WID)が援助政策の重要なスローガンとなってきたことから、小規模経営の女性農民

に対する援助が活発におこなわれたこと、などである。

第3章では、女性による野菜生産の活発化とそれがもたらす現金収入の増加が、夫婦間の社会経済的な力関係(ジェンダー・ポリティクス)にどのような影響をもたらしかが分析される。著者は、夫婦間の力関係の変化を2段階に分けている。第1の段階は女性による野菜生産が活発化し始めた初期の頃であり、農民自身の語を借りれば、女性農民が野菜畑を「第2の夫」としはじめた時期である。野菜畑が「夫」になったという表現には、女性農民が野菜畑での労働にばかり多くの時間をかけるために、本来夫に対しておこなうべき世話や払うべき礼儀をおこなわなくなった、という男性側からの非難の意味が込められている。一方女性農民から見れば、本来家計を支えるべき男性農民がおこなう落花生生産が衰退する中で、現金収入を家計にもたらししてくれる「第2の夫」(野菜畑)に多くの時間と労力を注ぐのは当然である。このように女性による野菜生産の活発化により、所得稼得者としての夫の重要性が低下し、それにしがつて夫婦間の社会経済関係にも変化が生じはじめたのが、第1の段階である。

女性農民が伝統的な妻としての仕事を十分に果たさなくなり、同時に夫の側の経済的地位が相対的に低下するというような上記の状況は、当然のことながら夫の側の反発を招く。妻たちはこのような状況下で、野菜生産から得た現金収入を巧みに使って、夫の承認を文字通り「買う」戦略を採るようになる。これが夫婦間における力関係の変化の第2段階である。女性農民たちは野菜生産からの収入で、元来男性の責任とされていた様々な社会的儀礼の費用や子供の教育費などを負担しはじめたのみならず、夫に現金を貸したり贈与するなどして、「妻の役割」をおろそかにしながら野菜生産をおこなうことに対して夫の同意を取り付ける。この行動は一見、妻の行動を制限する夫の家父長的な権利を温存する結果となっているようにも見える。しかし著者はこれを、世帯内における自らの経済的地位を高めることによって妻の側が伝統的な夫婦間の社会経済関係を徐々に変革し、夫からの独立を獲得するためにとっている

戦略的な行動であると分析している。

第4章では、女性農民が野菜生産をおこなう際にどのような障害に直面し、その障害にどのように対処しているかが検討される。彼女らが直面する障害には、生産した野菜をいかにして市場に運搬するか、収穫期の偏りにともなう収入の季節変動をどう克服するか、不足する労働力をどう確保するか、などがある。それぞれの障害に対する女性農民の対処の方策は多様であるが、母と娘、叔母と姪など、女性同士の共同を軸とした戦略が多く採られていることが明らかにされている。

第5章と第6章では、援助供与者側の志向が「環境」に重点を置く開発介入にシフトする中で新たに導入された、アグロフォレストリーのプロジェクトがとりあげられる。著者は、この開発イデオロギーのシフトと新たな開発介入の中で、女性農民の野菜畑が男性農民の果樹園に取って代わられていく過程を検討している。

ガンビアでは土地の権利関係がジェンダーを軸に明確に区別されている。稲作に適した低地を保有する女性はその土地権利を娘に委譲でき、一方高地で落花生や穀類を生産する男性は土地を自分の息子に相続させる。1970年代後半から活発化した女性による野菜生産は、もともと男性が権利を有する土地でおこなわれ、女性農民は男性地主から用益権を獲得して生産をおこなっていた。この土地用益権は相続等により本人以外に委譲することが許されておらず、借り受けた本人以外が土地を使用する場合は新たに地代を払う必要がある。しかし野菜生産が活発化するにつれ、女性農民は地主の許可なしに自分の娘に野菜畑を委譲したり、使用する土地の範囲を地主の許可なく拡大するなどして、一時的で本人限りであるはずの土地用益権を、事実上女性農民の保有権に近いものにする戦略を採っていた。

1980年代末以降に多くの援助団体の支援を得て導入されたアグロフォレストリーのプロジェクトは、野菜畑のある土地の権利が事実上女性によってコントロールされていた上記のような状態から、男性地主が当該土地の権利を自分の支配下に取り戻す格好の機会を与えた。男性地主は植林を進めるプロジェ

クトに積極的に参加し、女性農民の野菜畑がある土地に果樹園を造成していったのである。自らの果樹園を造成する過程で男性地主は、そこで野菜生産をおこなっていた女性農民の労働力を巧妙に利用した。すなわち野菜畑を残したままその中に苗木を植え、野菜生産のために女性がおこなう水やりがそのまま植栽された苗木に水分を与えるようにする。そして苗木が生長するにつれて樹冠が広がり周囲に影響を作るとなると、樹木の周辺では日照不足のために野菜生産ができなくなり、女性農民はそこでの野菜生産をあきらめなければならない。このように「環境保全」を前面に出したアグロフォレストリーのプロジェクトは、男性地主が女性の労働力を利用しながら自らの樹木作物を生長させてそこから経済的利益を得る機会を与えるとともに、女性の野菜生産に不適な環境を作り上げてその土地から徐々に女性農民を駆逐して男性地主に土地権利を取り戻す機会を与えたのである。環境保全においては女性が重要な役割を果たしており、また環境保全は女性の利益につながるという、女性と環境を決定論的に結びつけるエコフェミニズムの影響のもとに実施されたこのプロジェクトは、現実には男性地主によって巧妙に利用され、結果として女性農民の利益を害する機能を果たすことになったと著者は結論づけている。

本書のタイトル“Shady Practices”は、植林によって木陰の多い(shady)状態がつけられたために女性農民の野菜生産が不可能になった事実と、このようなアグロフォレストリーの実践には問題がある(shady)という著者の見解の2つをかけたものである。

II 評 価

本書で著者が採用しているアプローチは、アフリカの農民の経済活動を「それを取り巻く政治経済的環境と、それが実際におこなわれる生産の場である自然環境の両者の関連性の中で」[島田 1999, 207]とらえようとする、ポリティカルエコロジーのものである。このアプローチでは、環境変化や農業生産の変化を、個人や社会集団など様々な行為主体間の

相互作用と、国家や国際機関などローカルな環境に影響を与える外部の行為主体との相互作用が複雑に絡み合った結果生じたものとしてとらえる。著者が本書で注目したのは、野菜生産の活発化とその後のアグロフォレストリーの普及という変化の中で、世帯内における夫と妻、土地権利を有する男性地主とそこで野菜生産をおこなう女性農民、開発介入をおこなう援助団体や政府など、様々な行為主体がどのような相互作用を繰り返しているかという点であった。調査対象地域での20年にもわたる長期的な変化を綿密にあとづけ、多くの行為主体間の多様で複雑な関係を明らかにしており、学術的な面で多くの示唆に富んでいる。

さらに学術的な示唆のみならず、本書が示した開発プロジェクトの計画・実施における実践的な示唆も重要である。「環境」を前面に押し出したアグロフォレストリーのプロジェクトでは、しばしば樹木を植栽すること自体が最重要目標となる。しかし本書が詳細に示しているように、樹木および樹木が植栽されている土地には、地域独自の複雑な権利関係が存在する。そしてその権利関係は、ジェンダー間や地主小作間など社会内の様々な権力関係や制度と密接に関係しながら、ダイナミックに変動している。樹木、作物、土地などの資源に対する権利関係は常に社会内の権力関係の投影でもあるから、そのような複雑な関係を理解しないままに実施される開発介入は、特定社会集団への悪影響をもたらすことがある。本書におけるガンビアの事例研究は、開発介入におけるこのような危険性を明確に示したものと見えよう。

ただし本書が開発介入が地域社会にもたらす影響を一方向的に分析しているのではなく、逆に住民の側が開発介入を積極的に自分の利益のために利用していく過程に注目している点は強調しておかなくてはならない。1970年代後半から始まった野菜生産の活発化の過程では、WIDを重視する援助機関の動向

を女性農民たちが積極的に利用し、世帯内における女性の経済的地位の向上や男性との社会的関係の変革に結びつけていった。その後、外からの開発介入の重点がアグロフォレストリーにシフトすると、その機会を男性地主が巧みに利用して自らの土地権利を女性農民から取り戻していった。このような様々なアクターたちが社会経済的な環境の変化の中で積極的に繰り返す広げる、一種の「せめぎあい」こそが著者の分析の中心なのであり、地域住民が開発介入の単なる受益者や犠牲者に矮小化されていない点は強調しておく必要がある。

最後に、本書に対する評者の不満を一点だけ表明したい。それは、本書の分析が男女間の権力関係に重点を置いているために、分析の軸があまりに「男性対女性」に偏りすぎている印象を受けることである。同じ男性農民でも土地権利を有する層と有さない層との関係はどのようなのか、そのような土地権利の相違は「夫対妻」の権力関係にどのようなバリエーションを与えるのか。また同じ女性農民でも経営規模や経営戦略の相違にもとづく利害関係の対立や権力関係の相違はないのか、などの点に関する分析については本書では二次的な重要性しか与えられていない。このような「男性」、「女性」というそれぞれのカテゴリーの内部に存在する相違や、異なる社会経済的背景にある「男性同士」、「女性同士」が繰り返す広げるポリティックスも、ジェンダー・ポリティックスと同様に重要であると評者は考えるからである。

文献リスト

- 島田周平 1999. 「新しいアフリカ農村研究の可能性を求めて——ポリティカル・エコロジー論との交差から——」池野旬編『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所。

(アジア経済研究所地域研究第2部)